コンドーム購入および使用に関する行動の変容ステージと羞恥感情との関連¹

樋口 匡貴 広島大学 中村 菜々子 兵庫教育大学

Relationship between embarrassment and stages of change in purchasing or using of condoms

Masataka Higuchi (Hiroshima University) and
Nanako Nakamura (Hyogo University of Teacher Education)

This research focused on (a) embarrassment at the time of condom purchase or use, and (b) stages of change (Prochaska & DiClemente, 1983) as psychological factors related to the use of condoms. A written questionnaire was completed by 376 university students. For condom purchases, ANOVAs revealed that scores for “intent of behavior” increased as participants moved from the “precontemplation” stage to the “action” stage. The scores for embarrassment, and many factors of embarrassment, were lower in the “action” stage than in the other stages. However, the patterns of condom use scores were unclear. These results indicate that with regard to condom purchases, persons who are in the “preparation” or earlier stages (i.e., persons who are not purchasing condoms) are particularly susceptible to embarrassment.

Key words: promotion of condom use, embarrassment, stages of change in behaviors.

The Japanese Journal of Psychology
2010, Vol. 81, No. 3, pp. 234-239

HIV・AIDS 問題は、現代社会が抱える大きな課題の一つであり、心理学による貢献も必須である。2008 年 6 月末の時点までに日本において報告された HIV (human immunodeficiency virus: ヒト免疫不全ウイルス) 感染者と AIDS (acquired immunodeficiency syndrome: 後天性免疫不全症候群) 患者の合計は 14 624 名であり (凝固因子製剤による感染を除く)、現在も増加の一途をたどっている (厚生労働省エイズ動向委員会, 2008)。このうち感染経路が性的接触であるものは実に 78% を占めている。

性的接触による HIV 感染が非常に多いという現状を踏まえると、現実的かつ効果的な感染予防行動はコンドームの適切な使用に他ならない。適切なコンドーム使用の促進を目指した様々な研究が、多様な理論に基づいて実施されてきた (長宗, 2004)。本研究では、中でも特に行動変容の汎理論モデル (Prochaska & DiClemente, 1983)、さらにはその中心概念である行

動の変容ステージ (stages of change) に注目する。

Prochaska & DiClemente (1983) によると、行動の変容ステージとは、健康行動の獲得に至るまでのプロセスにおける代表的な段階を示すものであり、無関心期 (行動変容を起こすことを考えていない段階)、関心期 (行動変容をいずれはと考えているが、まだ実行していない段階)、準備期 (近い将来の行動変容を具体的に考えてはいるが、まだ実行していない段階)、実行期 (行動変容を実際に行っている段階)、維持期 (行動変容が 6 ヶ月以上持続している段階) のステージから構成されている。本人が所属するステージは、健康行動実施に対する本人の準備性 (関心や実行の程度) の程度を示しているため、ステージを一つずつ移行させることを目指した介入を実施することで、行動変容に及ぼす効果を従来の健康教育より高めることが可能になる。実際に、禁煙プログラムや薬物依存者への心理療法において、変容ステージ理論の有効性は実証されており (Prochaska, Norcross, & DiClemente, 1994)、エイズ予防教育への適用も推奨されている (Kafaar, Kagee, Lesch, & Swartz, 2007; 木原, 2006; 長宗, 2004)。エイズ予防の観点からは、コンドームの使用は常に維持されることが必要であり、持続的でない使用や購入は予防にとっては大きな意味を持たな

Correspondence concerning this article should be sent to: Masataka Higuchi, Department of Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-hiroshima 739-8524, Japan (e-mail: masataka@hiroshima-u.ac.jp)

¹ 本研究は平成 19 年度科学研究費補助金 (若手研究(B), 課題番号 19730392, 研究代表者 樋口 匡貴) の補助を受けた。

い。この点において変容ステージ理論は、興味関心の段階から持続的な使用に至るまでを段階的に捉えることを可能にするだろう。

長宗(2004)は、変容ステージを検討したエイズ予防学分野における研究を展望し、これまでに変容ステージの分布や意思決定バランスとその関連が多く検討されてきたことを指摘している。長宗(2004)の展望で示されてきた先行研究からは、変容ステージが実行期に移行するにつれて、当該行動実施の自己効力感が増加し、さらに“安心できる”といったメリットの評価が高まり、一方で“面倒くさい”といったデメリット評価が低くなることなどが示されてきたと総括できる(Grimley, Prochaska, & Prochaska, 1997)。

これまでに変容ステージとの関係が検討されてきた変数がある一方で、コンドーム使用にとって重要な変数でありながらもまだ変容ステージとの関係が検討されていないものも存在する。その一つが羞恥感情である。Helweg-Larsen & Collins (1994)はコンドーム使用の阻害因を整理し、UCLA 多次元コンドーム態度尺度を作成した。その結果、コンドーム使用の阻害因として指摘された5因子のうち、二つが“コンドーム使用、使用交渉時の羞恥感情”、“コンドーム購入時の羞恥感情”であった。さらに Dahl, Gorn, & Weinberg (1998)や、Moore, Dahl, Gorn, & Weinberg (2006)も、羞恥感情がコンドームの使用や購入の大きな阻害要因であることを示している。

コンドーム使用については、購入、持ち運び、保存、使用、処分という五つの段階に区分できるが(Moore et al., 2006)、本研究では、Helweg-Larsen & Collins (1994)が羞恥感情との関連を指摘している購入と使用の段階を検討の対象とする。そしてこれらの行動を行う際に生じる羞恥感情に注目し、変容ステージと羞恥感情との関連を検討することを目的とする。変容ステージ理論の有効性は、行動変容に向けてステージに応じた適切なアプローチを可能にする点にある。本研究の検討によって、どのステージにいる対象者には羞恥感情を低減させる介入アプローチが必要なのかなど、行動変容に向けたより実践的な知見が得られるだろう。

次に羞恥感情に関する先行研究では、その認知的な発生因が明らかにされている。すなわち、“社会的評価懸念”(項目例：パートナーが私のことをどのように評価するか、気がかりだ)、“自己イメージ不一致”(項目例：そんなことをしている私は、自分らしくないと思う)、“相互作用混乱”(項目例：パートナーに対してどのように行動すべきか、混乱してしまう)、“自尊心低減”(項目例：こんなことをしている自分はだめな人間だと感じる)の4種類が羞恥感情の発生因になっているという(樋口, 2002)。そこで羞恥感情の認知的発生因と変容ステージとの関連についても検

討を行う。

また、本研究で利用する汎理論モデル(Prochaska & DiClemente, 1983)においては、自己効力感も一つの中心概念である。コンドーム購入や使用行動の変容ステージと自己効力感との関連についても、数多くの研究によって示されてきた(Grimley, Prochaska, Velicer, & Prochaska, 1995)。そのため本研究においても、コンドーム購入や使用行動に対する自己効力感を測定し、変容ステージとの関連についても検討する。

方 法

調査対象者および調査実施方法

中国地方 A 大学生 260 名および関東地方 B 大学生 116 名の合計 376 名の大学生を対象に集合調査法による調査を実施した(男性 174 名、女性 178 名、不明 24 名)。平均年齢は 20.01 歳($SD=1.22$)であった。

調査用紙の内容

調査対象者には、コンドーム購入場面に関して回答を求める質問紙(コンドーム購入条件)またはコンドーム使用場面に関して回答を求める質問紙(コンドーム使用条件)のどちらか一方を配布し回答を求めた。コンドーム購入条件に関しては、“ドラッグストアやコンビニエンスストアでコンドームを買う時”という場面を想定させ、コンドーム使用条件に関しては“セックスの際に、コンドームを使用する時(パートナーにコンドームの使用を依頼・提案する時)”という場面を想定させて回答を求めた。調査用紙の表紙には、無記名で実施されプライバシーは保護されること、回答中に不愉快になった場合には回答を直ちにやめても構わないことの2点を明記した。人口統計学的変数(性別、年齢)以外の調査項目に関しては以下のとおりである。

羞恥感情 樋口(2000)の作成した羞恥感情の状態を測定する計 23 項目を使用した(項目例：恥ずかしさ、おどおどした気持ち、ばつの悪さ)。“感じない”(1点)から“非常に感じる”(4点)の4段階で評定させた。得点が高いほど、強く羞恥感情を感じていることを意味する。本研究のデータにおいて、23 項目での α 係数は .93 であり、分析には 23 項目の加算平均を使用した。

羞恥感情の発生因 樋口(2002)を参考に、羞恥感情の4種類の発生因を測定する項目を各発生因につき3項目ずつ、合計 12 項目作成した。“当てはまらない”(1点)から“非常に当てはまる”(4点)の4段階で評定させた。得点が高いほど、該当する発生因を強く意識していることを意味する。各発生因の α 係数は .87 から .93 であり、分析には各発生因の項目の加算平均を使用した。

Table 1
Stages of change for condom purchase and condom use / use negotiation

	Pre- contemplation	Contemplation	Preparation	Action	Total
	<i>n</i> (%)	<i>n</i> (%)	<i>n</i> (%)	<i>n</i> (%)	<i>n</i>
Condom purchase					
Male	9 (11.3)	16 (20.0)	5 (6.3)	50 (62.5)	80
Female	27 (31.0)	23 (26.4)	12 (13.8)	25 (28.7)	87
Total	36 (21.6)	39 (23.4)	17 (10.2)	75 (44.9)	167
Condom use / use negotiations					
Male	3 (3.4)	6 (6.8)	9 (10.2)	70 (79.5)	88
Female	3 (3.7)	20 (24.7)	9 (11.1)	49 (60.5)	81
Total	6 (3.6)	26 (15.4)	18 (10.7)	119 (70.4)	169

行動意図 4項目を作成し（項目例：自分はこの行動をするだろう），“当てはまらない”（1点）から“非常に当てはまる”（4点）の4段階で評定させた。得点が高いほど行動意図が大きいことを意味する。4項目での α 係数は.84であり，分析には4項目の加算平均を使用した。

自己効力感 想定させた行動を実施する自己効力感について，“あなたは，ドラッグストアやコンビニエンスストアで，コンドームを買うことができますか？買うことについての自信をお聞きます。”とした上で“自信がまったくない”（0点）から“とても自信がある”（100点）の100点満点で尋ねた。なおコンドーム使用条件の場合は，教示を使用を表すものに変更した。

変容ステージ 想定させた行動の変容ステージについて，無関心期，関心期，準備期，実行期のいずれの段階にあるか4段階で尋ねた。コンドーム購入に関しては以下の通りの項目であり，使用に関しては購入を表す表現を“使う（使うよう頼む）”に変更して使用した。(a)無関心期では，“コンドームを買うことはないし，これからもそうするつもりはない”，(b)関心期では，“コンドームを買うことは，今のところないが，いずれ買おうと考えている”，(c)準備期では，“コンドームを買おうとしたこと，またはどうやって買おうか具体的に考えたことがあるが，まだ実際にそうしていない”，(d)実行期では，“コンドームを実際に買っている”であった。なおステージを問う質問文には，行動の持続時間を含めなかった。そのため本研究では，期間は問わず実行しているかどうかのみ尋ねた。また変容ステージに関しては，コンドーム購入や使用行動を想定させるものの，調査対象者自身の実際の行動段階を問う項目となっている。

結 果

変容ステージに関する項目に欠損があった調査対象者を除くと，コンドーム購入条件は172名（男性80

名，女性87名，不明5名），コンドーム使用条件は176名（男性88名，女性81名，不明7名）となった。この計348名からのデータを分析の対象とした。変容ステージ以外の項目の欠損値に関しては，各項目の平均値を代入して分析に使用した。

性別の影響

条件別に，性別ごとの変容ステージの状態を示したのがTable 1である。性別×変容ステージの χ^2 検定を行ったところ，購入条件においては $\chi^2(3)=21.22$ ($p<.001$)，使用条件においては $\chi^2(3)=10.97$ ($p<.001$)となった。性別によって変容ステージの分布が異なることが分かる。

また，各変数に関して，条件ごとに性（2水準）×ステージ（4水準）の2要因分散分析を行ったところ，性別による有意な交互作用効果はみいだされなかった（コンドーム購入条件： $F(3, 159)<2.04$, ns ；コンドーム使用条件： $F(3, 161)<1.19$, ns ）。なおコンドーム購入条件における自尊心低減，コンドーム使用条件における羞恥の発生因4種類の各得点に関しては，分散が0となる群が存在したために分散分析を行わなかった。一方性別の主効果に関しては，コンドーム購入条件においては，分析に使用した得点に関していずれも有意となった（ $F(1, 159)>5.59$, $p<.05$ ）。全体的に，羞恥感情およびその発生因は男性よりも女性の方が高く，行動意図と自己効力感の得点は，女性よりも男性の方が高い結果であった。コンドーム使用条件では，有意な性別の主効果はみられなかった（ $F(1, 161)<1.83$, ns ）。

有意な交互作用効果がみいだされなかったこと，調査対象者数が少ないことの二つの理由から，以降の分析においては，性別は取り上げないこととした。

変容ステージと羞恥感情およびその発生因との関連

羞恥感情およびその発生因の得点について，条件ごとに各ステージ別の平均値と標準偏差を算出した

Table 2
Means, SDs, and results of ANOVAs for condom purchase

Condition of Condom purchase	Pre-contemplation	Contemplation	Preparation	Action	F(3, 168)
<i>n</i>	37	41	17	77	
Embarrassment	2.49 ^a (0.79)	2.24 ^{ab} (0.73)	2.03 ^b (0.64)	1.45 ^c (0.57)	24.92***
Apprehension of social evaluation	2.47 ^a (1.03)	2.14 ^{ab} (1.02)	1.90 ^{bc} (0.69)	1.39 ^c (0.66)	15.78***
Inconsistency with self-image	2.66 ^a (0.99)	2.25 ^{ab} (1.00)	1.92 ^b (0.77)	1.34 ^c (0.59)	25.52***
Disruption of social interaction	2.70 ^a (1.02)	2.36 ^a (1.12)	2.20 ^a (0.91)	1.46 ^b (0.68)	19.28***
Loss of self-esteem	1.84 ^a (1.03)	1.24 ^b (0.52)	1.22 ^b (0.44)	1.06 ^b (0.30)	14.48***
Intent of condom purchase	1.50 ^c (0.53)	1.96 ^b (0.64)	1.88 ^{ab} (0.38)	2.99 ^a (0.70)	57.78***
Self-efficacy	34.24 ^c (35.72)	61.82 ^b (29.18)	46.47 ^{bc} (34.33)	90.19 ^a (18.14)	40.42***

Note 1. Standard deviation are shown in parentheses.

Note 2. Mean in the same row followed by a different superscript letter differ significantly in the Tukey's HSD test.

*** $p < .001$

Table 3
Means, SDs, and results of ANOVAs for condom use

Condition of condom use	Pre-contemplation	Contemplation	Preparation	Action	F(3, 172)
<i>n</i>	6	28	18	124	
Embarrassment	1.29 ^a (0.46)	1.62 ^a (0.73)	1.65 ^a (0.73)	1.33 ^a (0.44)	3.69*
Apprehension of social evaluation	1.17 ^b (0.41)	1.57 ^{ab} (0.78)	1.85 ^a (1.01)	1.33 ^{ab} (0.52)	4.60**
Inconsistency with self-image	1.00 (0.00)	1.61 (0.73)	1.41 (0.74)	1.16 (0.34)	—
Disruption of social interaction	1.22 ^a (0.54)	1.74 ^a (0.91)	1.85 ^a (1.03)	1.41 ^a (0.58)	3.68*
Loss of self-esteem	1.00 (0.00)	1.21 (0.60)	1.15 (0.42)	1.08 (0.29)	—
Intent of condom purchase	2.79 ^{ab} (1.04)	2.55 ^b (0.76)	2.72 ^{ab} (0.72)	3.38 ^a (0.67)	13.97***
Self-efficacy	75.00 ^a (41.83)	78.65 ^a (25.29)	74.06 ^a (24.83)	90.85 ^a (14.82)	6.40***

Note 1. Standard deviation are shown in parentheses.

Note 2. Mean in the same row followed by a different superscript letter differ significantly in the Tukey's HSD test.

Note 3. “—” in F columns means ANOVA was not conducted.

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(Table 2, Table 3)。なおコンドーム使用条件における自己イメージ不一致および自尊心低減の得点に関しては、無関心期の回答者6名が全員“1”をマークし分散が0となったため、分散分析を行わなかった。

各ステージ別に算出した得点について、条件ごとに1要因分散分析を用いてステージ間の比較を行ったところ、羞恥感情および分析に使用した発生因のいずれの得点に関してもステージの有意な効果がみられた。

分散分析および Tukey の HSD 法による多重比較の結果を Table 2, Table 3 に示す。

変容ステージとその他の変数との関連

各条件で提示された場面に応じた行動意図と自己効力感の得点に関して、条件ごとに各ステージ別に平均値と標準偏差を算出した (Table 2, Table 3)。

これらの得点について、条件別に 1 要因分散分析を用いてステージ間の比較を行ったところ、いずれの条件においてもすべての得点でステージの有意な主効果がみられた。分散分析および Tukey の HSD 法による多重比較の結果を Table 2, Table 3 に示す。

考 察

本研究の結果から、コンドーム購入行動に関しては、変容ステージが進むにつれて羞恥感情およびその発生因が低減していくことが示された。特に実行期における羞恥感情およびその発生因の多くは準備期以前に比べて低いものとなっていた。すなわち、コンドームを実際に購入している人は購入していない人に比べてコンドーム購入時にあまり恥ずかしさを感じていないという結果であり、羞恥感情がコンドーム購入の実行を阻害する大きな変数の一つであるというこれまでの知見 (Helweg-Larsen & Collins, 1994) を強く支持するものである。同時に、コンドーム購入を促進させるために、準備期以前の対象者に羞恥感情の低減を目指した介入を行うことの有用性が示唆される。一方で実行期にある対象者に行動維持をさせるために羞恥感情低減アプローチを行うことは、それほど効果を持たない可能性が示唆される。

次に、コンドーム購入時の羞恥感情はステージが進むにつれて下降しているが、特に準備期から実行期にかけては急落するパターンを示した。この結果は、準備期以前の調査対象者と実行期における調査対象者との間に大きな違いが存在することを示唆している。準備期以前と実行期との決定的な違いは、コンドームを実際に買っているかどうかである。本研究の結果は、実際に購入行動をとることがその後の羞恥感情の低減に結びつき、その結果購入行動が維持されるというパターンを示唆するものである。コンドーム購入時の羞恥感情に関する従来の研究では、羞恥感情がコンドーム購入行動を抑制するという時点までの因果を検討してきた (Dahl, Manchanda, & Argo, 2001)。しかしながら本研究の知見は、購入行動がその後の羞恥感情を規定するという可能性を示唆している。本研究は横断的な検討を行ったため、もちろんこの可能性について直接言及することはできない。羞恥感情と行動との因果関係については今後検討すべき課題である。

一方、コンドーム使用行動に関しては、羞恥感情やその発生因の得点と変容ステージとの明確な関連がみ

いだされなかった。有意な関係ではなかったが関係性の傾向をみると、羞恥感情とその発生因の得点は、変容ステージと逆 U 字型の関係、すなわち関心期および準備期において得点が高いという傾向が読み取れた。無関心期では、実際にコンドームを使うことや、使うようパートナーに求めること自体を具体的にイメージすることがないために羞恥感情が発生しないのかもしれない。

本研究ではコンドーム購入および使用行動に関して、変容ステージと羞恥感情との関連を中心に検討した。本研究の限界と今後の課題は以下の 2 点である。第一に、コンドーム使用行動に関して無関心期のデータ数が 6 名と非常に少ないなど、データ収集における問題がある。ステージの分布や羞恥感情の得点に性別による相違が認められたにもかかわらず、データ数が少なかったことで、変容ステージと諸変数との関連では性別の影響が統計上有意にはならなかった可能性がある。性別以外にも、性交経験の有無や現在のパートナーの有無によっても結果が変動する可能性が考えられ、データ収集におけるこの問題は、本研究の結論の一般化に対し、非常に大きな制約をもたらすものである。したがって、今後は多様な調査対象者からの多数のデータを収集していくことで、結果を一般化し、性別や性別以外の要因 (性交経験の有無や現在のパートナーの有無など) について検討を重ねることが課題である。第二に、変容ステージの測定について検討する必要がある。本研究ではステージを問う際、行動の持続期間を含めなかった。日本人大学生を対象としたコンドーム使用行動に関する変容ステージ研究はまだ緒についた段階であるため、羞恥感情の検討と併せて、今後さらに検討すべき課題であろう。

本研究では、羞恥感情がコンドーム購入を阻害している可能性が示された。今後は、準備期以前の調査対象者に対して、羞恥感情を低減させ、実行期へと移行させる要因を詳細に検討し、羞恥感情低減のための介入プログラムを開発していく必要があるだろう。

引用文献

- Dahl, D.W., Gorn, G.J., & Weinberg, C.B. (1998). The impact of embarrassment on condom purchase behavior. *Canadian Journal of Public Health*, 89, 368-370.
- Dahl, D.W., Manchanda, R.V., & Argo, J.J. (2001). Embarrassment in consumer purchase: The roles of social presence and purchase familiarity. *Journal of Consumer Research*, 28, 473-481.
- Grimley, D.M., Prochaska, G.E., & Prochaska, J.O. (1997). Condom use adoption and continuation: A transtheoretical approach. *Health Education Research*, 12, 61-75.

- Grimley, D.M., Prochaska, J.O., Velicer, W.F., & Prochaska, G.E. (1995). Contraceptive and condom use adoption and maintenance: A stage paradigm approach. *Health Education Quarterly*, **22**, 20-35.
- Helweg-Larsen, M., & Collins, B.E. (1994). The UCLA multidimensional condom attitudes scale: Documenting the complex determinants of condom use in college students. *Health Psychology*, **13**, 224-237.
- 樋口 匡貴 (2000). 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, **16**, 103-113.
(Higuchi, M. (2000). A study on the structure of shame. *Japanese Journal of Social Psychology*, **16**, 103-113.)
- 樋口 匡貴 (2002). 公恥状況および私恥状況における恥の発生メカニズム——恥の下位情緒別の発生プロセスの検討——感情心理学研究, **9**, 112-120.
(Higuchi, M. (2002). The mediating mechanisms of embarrassment in public and private situations: The process of the subcategories of embarrassment. *Japanese Journal of Research on Emotions*, **9**, 112-120.)
- Kafaar, Z., Kagee, A., Lesch, A., & Swartz, L. (2007). Is participation in HIV vaccine trials a health promoting behavior? *AIDS Care*, **19**, 1307-1309.
- 木原 雅子 (2006). 10代の性行動と日本社会——そして WYSH 教育の視点——ミネルヴァ書房 (Kihara, O. M.)
- 厚生労働省エイズ動向委員会 (2008). 第114回エイズ動向委員会結果報告 2008年8月19日〈<http://api-net.jfap.or.jp/status/2008/0808/kekka.pdf>〉(2008年10月1日)
(Ministry of Health, Labour, and Welfare)
- Moore, S.G., Dahl, D.W., Gorn, G.J., & Weinberg, C.B. (2006). Coping with condom embarrassment. *Psychology, Health and Medicine*, **11**, 70-79.
- 長宗 典代 (2004). 変化ステージ理論を用いたエイズ予防行動学研究——コンドーム使用行動に焦点を当てて——日本エイズ学会誌, **6**, 37-41.
(Nagamune, K.N. (2004). AIDS prevention studies based on the stages of change model: Focusing on condom use behaviors. *Journal of AIDS Research*, **6**, 37-41.)
- Prochaska, J.O., & DiClemente, C.C. (1983). Stages and processes of self-change in smoking: Toward an integrative model of change. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **5**, 390-395.
- Prochaska, J.O., Norcross, J.C., & DiClemente, C.C. (1994). *Changing for good: A revolutionary six-stage program for overcoming*. New York: Quill.
- 2008. 11. 19 受稿, 2010. 1. 30 受理——